

リンゴにおけるグリーンクラスター期の霜害の特徴と危険限界温度の見直し

福島県果樹試験場 栽培部
平成16年研究報告

1 部門名

果樹ーリンゴー気象災害
分類コード 04-01-32000000

2 担当者

永山宏一・遠藤敦史・小松喜代松

3 要 旨

- (1) グリーンクラスター期における花器被害の様相及び品種ごとの被害程度を明らかにした。場内における中心花の被害及び結実の状況を見ると、「ふじ」で最も被害が多く、次いで「ジョナゴールド」と「王林」が多かったが、他の品種の被害はわずかであった。
- (2) 露地での観測において -4°C の最低気温を記録した現地のリンゴ園では、中心果の着果量が不足する傾向が明らかであった。同時に、着果した果実について追跡調査し、幼果期と収穫果の外観を比較したところ、果梗の亀裂、果梗基部のサビ、果梗基部から胴部にかけてのすじ条のサビ、果皮の毛じの脱落などが生じており、これらはいずれも収穫果の外観を損なうことにつながった。
- (3) アンケート調査により現地における被害の特徴を探った。主要品種の中では「ふじ」の着果不良が特に目立っていた。最低気温(露地)の範囲は $-2 \sim -4.5^{\circ}\text{C}$ であり、 -2°C でも実害につながる被害発生の状況が見られ、 -4°C では着果量が不足する傾向が強かった。また、樹勢の弱い樹や花芽の充実が悪い樹で被害が多く、気流の流れを遮る構造物のあるところや、霜穴となるくぼ地等での被害が多い傾向が認められた。
- (4) 場内及び現地調査等の結果から、現行の危険限界温度を見直す必要があると判断された。このため、工藤ら(1983他)の文献をもとに危険限界温度の改定案をまとめた。

4 その他の資料等

なし